

コロナ感染拡大のもとでの子どもの生活、学校の役割 —指導・支援・ケア、つながって生きることを問う—

シンポジスト

中村 正 (立命館大学産業社会学部 / 人間科学研究科教授)

堀江 理砂 (東京都公立小学校教諭)

コメンテーター

折出 健二 (愛知教育大学名誉教授、元同大学副学長)

コーディネーター

春日井 敏之 (立命館大学大学院教職研究科教授)

中村 正 (なかむら ただし)

立命館大学産業社会学部/人間科学研究科教授。立命館大学副学長などを経て、現在は教養教育センター長。立命館大学院教職研究科では科目担当(「人間理解論」)。専攻は、社会病理学、臨床社会学。少年刑務所、児童相談所、DV 加害男性相談における暴力臨床と研究。主著:『治療的司法の実践』(第一法規)、『ドメスティックバイオレンスと家族の病理』(作品社)他。内閣府男女共同参画審議会女性に対する暴力専門調査会委員等。

堀江 理砂 (ほりえ りさ)

東京都公立小学校教諭、星槎大学大学院教育学研究科修士課程 1 年在籍。

学級担任を経て、家庭科専科担当。日本生活教育連盟『生活教育』編集長。大学院では、「小学校家庭科における ESD を通して、自尊心を高め、市民となる実践研究」がテーマ。主著:『いのち輝く』(ルック)『あっ!こんな教育もあるんだ』(新評論)に分担執筆。雑誌『生活教育』『家庭科研究』『mundi』等に実践執筆。

1 趣旨説明

春日井: 本日は、多数ご参加いただきましてありがとうございます。教職研究科の春日井です。シンポジウムのコーディネーターを務めさせていただきます。表題のとおり、大会のテーマを設定させていただきました。

コロナ感染が広がり、既に 1 年余りが経過しようとしています。そのような中で、ボディーブローの連打を打たれているような状況が続き、子どもたちだけではなく、保護者、教職員、あるいは地域社会にも効いてきているのではないかと考

えています。

そのような中で、「指導・支援・ケア、つながって生きることを問う」をサブタイトルにしましたが、子どもたちの生活や願いを踏まえながら、私たちがつながって生きるということの意味を、現時点でもう一度問い直す、そのような必要があるのではないかと考えています。指導と支援とケアという視点を切り口にしながら、講演とシンポジウムの中で深めていきたいと考えました。

堀江先生からは、コロナ感染拡大のもとでの子どもの様子、学校での取り組みと家庭をつなげて

報告をいただきます。中村先生からは、家庭と地域、社会をつなげながら、コロナ感染拡大のもとでの若者の課題や取り組みについて、話題提供をいただきます。

お二人から 20 分ずつの話題提供を受けて、折出先生からコメントをいただき、質疑、ブレイクアウトセッション、さらに全体での意見交流という形で、皆さま方にもご参加いただきたいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

堀江先生も中村先生も、ご自身の PowerPoint で自己紹介がありますので、詳しくはそこに委ねたいと思いますが、堀江先生は、現在、東京都世田谷区立赤堤小学校教諭として勤務しながら、星槎大学大学院教育学研究科修士課程で、主として SDGs、あるいは ESD を通した教育の在り方をテーマに、実践研究を重ねておられるということです。それでは堀江先生、どうぞよろしく願いいたします。

2 堀江先生話題提供

堀江：こんにちは、堀江です。今、春日井先生からご紹介いただきました、東京都に勤めています。

担任を 15 年間務めたあと、家庭科専科で 5 年目です。「子どもの生活から」「仲間と共有・学び合い」、「五感を使う」「手仕事」「ESD、SDGs を軸にした教育」「自尊心」はこれまで実践で大事にしてきたことのキーワードです。日本生活教育連盟、日生連で初任者の頃から学ばせていただいています。『生活教育』という機関紙の編集長をしています。まだご購入でない方は、素晴らしい機関紙ですので、ぜひ購読をお願いします。

では、本題に入らせていただきます。私のシンポジウムでの役割は、現場の子どもたちの様子ということだと思いますので、今年 1 年間の様子を、最初に少し振り返りたいと思います。分散登校時の写真です。出席番号ごとに半分に登校してきている様子で、閑散と見るか、ゆとりがあると見るか・・・もう 1 枚は、クラス替え後、まだ会っていない級友にメッセージを送り合った掲示です。そこには、「まだ会えないね」「早くこの教室と一緒に勉強したいね」といったことが書かれていました。

次の写真は、本来なら、例年では、手をつないで入学式で入場した 6 年生が、分散登校中に、まだ入学式を迎えない 1 年生に向かってメッセージを書いて、いろいろなところに貼っていた様子です。少し文字は見えないのですが、「学校は楽しいよ」「一緒に今度遊ぼうね」などと書いていました。

次の写真は、A グループと B グループと、お互いのメッセージを貼り終わった状態です。分散登校中も、通常登校が始まってからも、よく子どもたちは、このメッセージを読み合っていました。

分散登校中の私の発見を 2 つ挙げさせていただきます。ずっと登校を渋っていた児童が、この分散登校中は、2 年生から 6 年生まで全員が登校しました。その理由が何なのかは、もう少し詰めていかなければいけないのですが、午前中だけ、午後だけという短時間の時間、給食がなかった、行事がなかった、それから、ソーシャルディスタンスを保つことで関わりが少なく済むなどということのかな、とも思います。

それから、もう 1 つ、家庭科で気付いたことなのですが、ミシン実技を分散登校中は半分の人数でやるわけで、40 人学級で半分だと 20 人でした。なんと待ち時間がなくて、個別指導が行き渡るので、少人数指導の良さを本当に実感しまして、子どもも、「すごくミシンが上手になるよね」「たくさん縫えていいね」と言っていました。

このように、元々コロナの前からあった問題が、良きにしろ悪きにしろ、いろいろ発見した内の 2 つをお話ししました。

次のスライドは、家庭科でコロナと SDGs と自分のくらしをつなげる授業を急きょ組み込んで行った際のものです。

これを行ったのには、2 つの理由があります。

1 つには、通常登校になってから、各教科で、4、5、6 月を「失った 3 カ月間」として、教科書をどこまで進められるか、取り戻そうと必死な状況が出ていました。本区では、元々月に 1 回は土曜日に授業だったのが、本日もそうなのですが、7 月からは、月に 2 回の土曜授業登校ということで時数確保を目指していました。

先ほど折出先生の発表の中の結衣さんが言って

いたように、「こんなに大ごとがあったのに、こんなふうに普通に教科書で勉強するのはありなの」という子どものつぶやきを聞きました。そこでの子どもの振り返りを、以下に挙げてみました。

1 月末からのコロナのニュースを振り返る中で志村けんさんが亡くなった記事を取り上げたのですが、「そんなことがあったよね、あれは3月だったっけ」、「毎日のニュースに追われていて、あっという間に忘れていた」と、子どもは言っていました。子どもの短期記憶を消去するスピードを、実感しました。

それから、2 つ目は、むしろいいことだったとも思うのですが、「コロナの前は、自分だけ、自分の国だけがいいと思っていたのだけれども、世界のつながりをコロナで思い知って、それでは駄目なのだと思った」。このような感想をもつ子はとても多かったことに驚きました。世界とのつながりの大切さということ子どもが実感することに、これまでは結構苦労したところなのですが、今年可否応なしに身をもって、この3カ月間で体感・実感できた貴重な世代だったのではないかと思います。

それから、最後は、先ほどの結衣さんの話ともつながる思いです。「こんなに大変なのに、今までと同じ授業、生活が始まっていて、「？」だった。もっとコロナや世界について学びたい」。子どもは、やはり現在進行形のことや、コロナのことや、感染症のことについて、もっと知りたい、学びたいという思いを強く持っているのだなということを見ることができました。

そのような中で、縮小してですが、運動会をやりました。異学年で励まし合ったり、教え合ったりする活動が少なくなっていく中で、うちの学校では他学年へのメッセージや同学年同士の励ましを廊下の掲示板で行っていました。

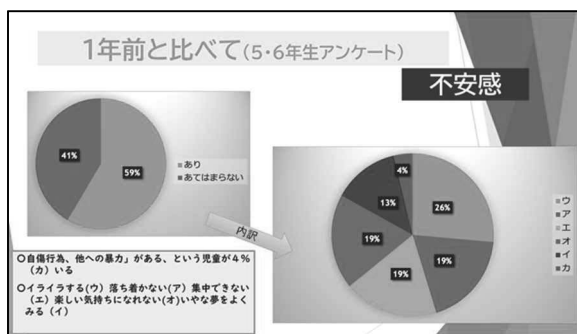
ニューノーマルな生活の様子を、2 点挙げていきます。給食の様子です。パーティションを立てて、もちろん班の形ではなく、前を向いています。食べ始めるぎりぎりまでマスクをして、マスクを外したあとは、黙食で食べています。

もう一枚の写真は、うちは体育が盛んな学校なのですが、体の接触のあるスポーツができない中

で、今年は例年にも増して、ソーシャルディスタンスが保てる縄跳びが、すごく盛んになっていた様子です。

次のページからは私が担当している5~6年生に今年について感じたことについてアンケートを行った結果です。コロナの影響がどのようになっているのか子どもたちと考えていきたいという理由が1つと、もう1つは、子どもと話している中で、何度か「先生、意外と今年はいいんだよ、忙しくなくていいんだよ」、「休み時間に教室にいられるのは最高」、等を聞いたからです。

また、家庭科で、今年調理実習が全くできなかったのですが、おうちで課題として調理してもらおうと、おうちの人も子どもの感想も「とても子どもたちといい時間を持つてました」、「うちのだしがこんなだっ初めて知って、これからはもっと料理がしたくなりました」などという、例年に比べて前向きなコメントが多かったのです。そこで、もう少し子どもたちの実態を知りたいと思いまして、アンケートをしました。



1 問目は、不安感について聞きました。これは成育医療研究センターのアンケートと同じような項目で、いらいらする、落ち着かない、集中できない、楽しい気持ちになれない、そのような辺りは、いわゆるうつ症状だと考えられるようではありますが、そのような数値は大きいです。

そして、気になるのは、グレーの**カ**です。これは、「自分の体を傷つけたり、家族やペットに暴力を振るうことがある」という、自傷行為や他への暴力があると書いている児童が4%いました。これは、5~6年生は210人なので、4%に当たると、8人から9人が、「ある」と答えているということで、気にはなります。一方、不安感が、「何もない」と答えている児童も41%います。これをどう見るか

は、皆さんで、あとで少し議論をしたいと思っています。

次は、「日常生活で1年前と比べて嫌だな」と思うことと、反対に「いいなと思う」ことを尋ねました。「嫌だなと思う」ことが「何もない」児童は、21%います。大人のアンケートで「嫌だなと思うことがない」というのが21%になることはないのではないかな、と思いました。ここも、子どもが環境に順応しやすいと見るのか、あきらめてしまっていると見るのかは、皆さんで議論をしたいと思います。

家族の不安感について、具体的には、「おうちの人がよく怒ったり、いらいらしたりするようになった」が^アで、18%です。それから、「おうちの人の在宅勤務が増えて、いつも見張られているように感じる」が^カで20%です。とにもかくにも、すごく家族に影響をされている小学生の実態が表れていると思います。

23%の^アは、「Zoomなどのネットの作業が増えて疲れる」で、これはうちの学校らしいと思いました。5～6年生は中学受験の子が多くて、休校期間中も、毎日Zoomで、塾の講習を受けていたという実態があります。「おうちの人の仕事が無くなって少なくなって、生活が苦しくなった」という1%は気になるところです。2%の^エの「習い事を辞めなくてはいけなくなった」というのも、経済的な理由かもしれません。

次は、これも少し驚いたのですが、反対に、「いいな」と思うことがある児童が84%いました。1位は、「ネットを前より使えるようになった」という^アの36%です。あとは、「家族と一緒に過ごせるようになった」「おうちの人が早く帰ってきて、みんなで仲が良くなった」で、この2つの30%と12%を合わせると、42%で1位になります。

本当に子どもは、家族がよりどころなのだと思います。実際に子どもと話をしていると、「最近お父さんが早く帰ってきて、毎日家でご飯を食べるようになった」「うざい」「うざいけれども話もいろいろできる」といった両面のことを、子どもからもよく聞きます。家族がよりどころだからこそ、DVだったり、先ほどの自死に至ったりするようなことなどの影響が強いのだなと思いました。

次は、学校生活について聞きました。「学校生活で嫌だなと思うこと」は、断然、行事の削減と縮小でした。5～6年生は宿泊行事が全てなくなり、いろいろなことが縮小されたり、なくなったりしています。2位の「休み時間の外遊びが、（交代でやるので）半分になってしまったということが嫌だ」は、小学生らしいです。それから、先ほどの写真でお示ししましたが、「給食の個食が嫌だ」というのも多いです。少数なのですが、「意見の共有が減り、友達の考えが分からなくなった」や、それから、さらに少数ですが、「iPadを使っている学習の開始が嫌だ」という児童も3%いました。

一方、学校生活で、「1年前と比べていいな」と思うことが85%もあるそうです。1位は約半数ですが、「iPadを使っている学習開始」をあげています。以下、「給食をパーティションを使って食べられる」「休み時間に外遊びに全員が出なくてはいけなかったのが、自由に好きなことをできると」というのも、13%もいます。「学校の行事削減で忙しくなくなった」という子どももいます。この辺りをどう考えるか、皆さんで議論をしたいと思っています。

すごく多かった、「iPadを使っている学習がいい」の理由を聞いてみました「YouTubeを見放題になる」ようなことを言うのかなと思ったら、意外とそうではないのです。「荷物が重い」「紙はかさばる」といったこともありますけれども、「みんなとすぐにつながるができる」「iPadだとAirDropで瞬間的に友達と共有できる、テレビに共有されるのが、すごくいい」と言っていました。

それから、「分かりやすく伝えるためにどのようにしたらいいかを考えられる」「プレゼンが簡単にできる」「友達との意見交換もできる」「学習のバリエーションが増えた」「遠い国の人、会ったことのない大人にも質問やインタビューができる」という意見が出ました。この理由を見て、子どもは友達や他者や、世界の人とのつながりが、非常に大切だと思っているということが、ここからもうかがえました。それから、最後の理由は、「先生の問いに答える授業は、待つ時間が多過ぎて退屈で、ipadを使えば自分でどんどん主体的に学びをしていける」ということでした。

まとめさせていただくと、先ほどの不安感のところ、いろいろ感の増加、自傷、他傷行為、落ち着かない、そのようなものはうつ傾向なのか、そこはやはり増幅していると読み取れました。それから、一方で、嫌なことはないと言っているのが、先ほども言いましたけれども、順応しているのか、あきらめなのかというふうにも考えられます。

2つ目のまとめは、元々コロナの前からそこにあって、浮き上がってきた問題が、今、さらに如実に見えるようになってきているのではないかと思います。貧困格差の拡大を、うちの学区は割と豊かなというか、大企業に勤めている保護者が多い地域です。なので、在宅勤務になっているおうちがほとんどです。だから、経済的な困り感は少ないと思います。そこで家族が仲良くなったといういい面も出てきています。

でも、一方で、自営業の飲食店の児童の子どもが、自由意見のところ、「お店がずっと赤字だったけど最近補助金が出て少し黒字になった」と書いていました。

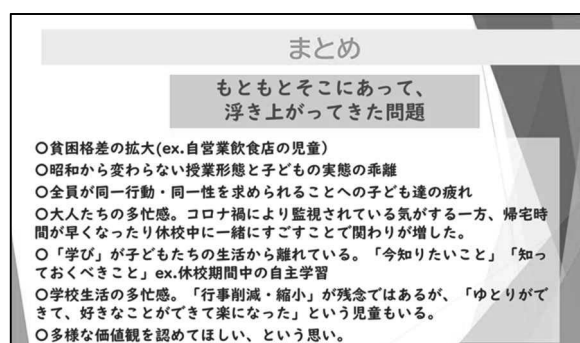
3つ目は、全員が同じ行動をしなさい、全員が外に出なさい、行事を楽しみなさい、同一性を求められることへの子どもたちの疲れも、今回、すごく見えるようになりました。

4つ目は、社会全体の多忙間です。大人、教師も周りの家族たちも、すごく多忙なのだなということが、非常に現れてきました。コロナ禍によって「監視されている、嫌だな、うざいな」と思う子どもがいる一方で、「一緒に過ごすことで関わりが増えてうれしい」という現実が出てきています。これまでの大人の多忙感が、子どもにとってどのようなものだったのかということも、考えなくてはいけません。また、大人だけではなく、子どももすごく忙しく過ごし、学校生活の多忙感が大きかったです。だから、行事削減と縮小は残念なだけけれども、好きなことができて楽になったという児童も少なくはない現実をしっかり見るべきです。

5つ目です。学びが、子どもたちの生活から離れてしまっているのではないかと危惧しています。「コロナと自分の暮らしのつながり」の授業の例

を挙げるまでではなくても、今知りたいこと、知っておくべきことが、何か普段の教育計画の、または指導要領や教科書を、やらなくてはいけないからやらせているということになっていないだろうかということが、今回はすごく出てきました。

「休校期間中は、自分の好きな学習が追求できて本当に楽しかった」などと言っている子もいました。休校期間中の遅れを取り戻そうと、詰め込もうとすると、昭和から変わらない授業形態と、子どもの実態の乖離（かいり）が一層、見えてきたのではないかと思います。



それから、最後に、先ほどの、登校渋り気味だった子の例はもちろんなのですが、多様な価値観を認めてほしいという思いも感じられました。

このアンケートは、うちの東京都23区の1学区のものなので、全国でやると、もっといろいろな様子が出てくると思います。これを機に、子どもの求めているものは何なのか、子どもは何を感じ、考えているのか、おうちの人と、その子どもがどのようにしているのかということを考えていく必要を感じました。このような機会を与えていただいたことに感謝します。ありがとうございました。

春日井：堀江先生、ありがとうございました。討論の中で、今いただいた問題提起も含めて、皆さん方と意見を交わすことができればと思います。それでは引き続き、中村先生に話題提供をお願いします。中村先生は、立命館大学の副学長等も歴任され、現在は産業社会学および人間科学研究科教授としてご活躍です。対人援助学会の理事長なども務めておられます。それでは中村先生、よろしく願いいたします。

3 中村先生話題提供

中村：中村といいます。私は、多分、このメンバーの中では教育や教育学から少し遠いところにおいて、社会病理学・臨床社会学という領域で研究と実践をしています。折出先生の話が幅広くて包括的だったので、重なるところも多かったり、堀江先生の実践とも重なる部分もあるので、それらはなるべく避けながら話をしていきます。

私の専門は、社会病理ですが、非行や犯罪や自殺などが対象です。特に、DV や虐待などの家庭内暴力問題に力を入れています。研究だけではなくて、大阪では、虐待のある家族への介入と支援をしています。そのような立場から、話をさせてもらいます。

折出先生が、アンラーンの話をされました。私もアンラーンという言葉に出会ったのが 1994 年でした。暴力のことを調査していたサンフランシスコでした。当時は辞書に載っていませんでした。でも、普通に市民社会で使われていたのです。それで、これは、上は DV だし、下は子ども同士のいじめや暴力なのですが、これは市バスに張ってあったポスターなのですが、普通にアンラーンという言葉が使われていて、その時から、相当難しい言葉だなと思っていて、調査と研究をずっと始めたのです。

暴力は学習されたものならば、ということで、そのアンラーンという言葉が、私にはずっと引っ掛かっていて、もう 30 年近く引っ掛かっている言葉です。これを、どのように実践するかということに関心があるということです。

**対人暴力加害の脱暴力支援
unlearnという言葉に出会う(1994年米国)**

犯罪化されていない領域の問題行動あるいは過剰に犯罪化されている逸脱行動を対象にしている。

→ Violence is learned. It can be unlearned.

たとえばコロナ禍での問題と重ねると、ステイホームの現実がみえてきます。コロナ禍で、皆さんがおっしゃっていたように、元々持っていた問題が、より脆弱（ぜいじゃく）な層へ、社会病理

として蓄積していったことが発現してきたということです。

例えば「DV相談+（プラス）」という内閣府の取り組みがあります。私は内閣府の DV 加害対応や女性に対する暴力専門調査会の委員や座長をしているのですが、従来の相談に加えてコロナ禍の家庭事情を勘案して新しい相談体制を構築したのです。ステイホームになればなるほど、ホームの持っている病理性が顕在化するだろうということは分かりきっていたことなので、DV 相談を増やしていくことになりました。相談窓口が増えれば、当然相談も増えてくるので、全国的に 2020 年の 4 月から 6 月にかけて DV 相談が 30% 程度増えました。これは、世界も同じ傾向なのです。さらに、夫婦の持っていた問題が、コロナ禍離婚という言葉も成立するぐらいに、増えてきました。

先ほどの先生の話もありましたように、虐待相談も、同じく増加傾向にあります。ホームにステイとはつまり関係がホームに閉じていくことになります。閉じていけばいくほど、相談しにくいという現実も出てくるのです。公にしにくいということです。ですので、これは 30% どころではないだろうと推測はできます。潜在化している問題が当然あるということです。

もう一つは、その中でも性的虐待ということも増えています。デートバイオレンス様の、思春期の性の問題が顕在化をしてきたと各所でいわれています。これは保健所の統計です。ティーンズの妊娠や、妊娠相談の増加、思春期の女の子に関わる問題です。

それと、変な言い方ですけども、家出ができない問題です。家庭が安全でない場合の子どもたちは、従来は地域にいろいろなネットがあったのです。たとえばネットカフェが営業していないということもあり、友達の家に行けないなどということもありまして、変な言い方ですけども、家出ができない問題ということで、家族に居づらい子どもたちが、どこに行けばいいのかということになってきました。これもまた、課題として見えてきています。

それから、皆さんがおっしゃった自殺の問題です。また SNS などを通じたゲートウエーが子ども

もを狙っています。子どもたちは、SNSも慣れたデジタルネイティブ世代なので、SNS側が、それは、社会そのものなので、社会の課題が子どもたちを狙っています。社会病理に巻き込まれやすくなるので、SNS対応、SNS的なコミュニケーションの状態をどのように対応するかということが出てきたと思っています。各所で報告されている社会病理的現実が、コロナ禍の1年間でより見えてきたということです。

私の実践の領域は、児童福祉などの領域なので、どちらかといえば、低所得層が多いので、家族の問題というのは、貧しさの問題とも相対的には関わっています。

これはユニセフの報告ですけれども、同じことです。コロナ禍がピークになった5月ぐらいに、以前から暴力的な扱いを受けていたり、適切な育児環境になかった子どもたちが、家庭で身体的、心理的、性的虐待を経験したり、目撃したりする可能性、この目撃する可能性というのは、分かりやすくいえば、夫婦のセックスを目撃した、それから、夫婦間の暴力を面前で体験した、このようなことが、当然養育環境としては良くないので、ステイホームの現実は、間接的にしろ直接的にしろ、そのような問題をもたらしています。ネットも、子どもたちをゲートウェイにしていますので、いろいろなテーマが出てきたということで、ユニセフが警告を発したということは、日本と同じです。

事件も起こりました。内閣府や厚生労働省や法務省も委員会をつくって、特にDVと虐待の関わりがあって、それを目撃しているという、家族の構造がより悪化しないようにするための調査研究事業や政策課題を委員会で議論をしています。ステイホームの現実をどのように乗り越えていけるかということが、1年前にはなかったテーマで、急速に浮上してきています。しかし元々持っていた問題という面もあるので、解決に向けて努力をしていくことになります。

研究レベルの話です。子ども虐待のことを重視するかというと、いろいろなレベルでの虐待を体験してきた子どもたちの予後、成長や発達のプロセスの中で、多様な問題行動が出てくるのが、

エビデンス的には分かっています。内向的になっていけば引きこもりや身体的な不調、不安、抑うつ、社会性の問題、外側に向かいますと攻撃的な行動、非行が典型ですけれども、そのような形でスペクトラムができて、このような問題行動が蓄積していく、その元に虐待があるということなのです。

ここの論点は、被虐待体験から予防する課題ができてきます。暴力あるいは虐待をどのように防ぐかです。課題がたくさんあります。後に述べるように私は刑務所でも仕事をしてきました。大人になってからも、さらに問題行動が蓄積していく人たちと更生のための対話をしていると、ほとんどといっていいぐらい、暴力が連鎖をしています。子ども時代の逆境体験といいます。もちろんそうではない人たちもいますが、現在、問題行動を繰り返す人たちの過去を見ると、このようなテーマがみえてきます。つまり、加害の裏には被害があるということです。

しかし、全ての被害の人たちがそのようになるわけではないということは、どこかで分岐していくわけです。分岐していく際に、その人たちはどのようにしてそれを乗り越えていったのだろうかという研究が要請されていて取り組んでいます。連鎖しなかった人たちは、私たちの加害者相談、あるいは暴力臨床の前には現れません。ここをどのように取り上げていくかということが研究上の課題となります。

暴力の加害者たちと対話をしていると、われわれの持っている常識が覆されていきます。怒りの感情があって暴力の行動に出ると、通例は考えられていますけれども、そうではありません。行動が先にあって、怒る現実を、周りにたくさんつくっていくのです。矢印が逆なのです。暴力的な問題行動とは、暴力でもって問題行動を解決しようとする選択肢を選んだのだと考えます。その後、怒りの感情を湧き上がらせることで、それが衝動的で感情にまかせて、自分では統制できない力に突き動かされていると正当化するのです。怒りの感情はなんともできないものだとか肯定することになっていきます。そこで、怒りの感情を抑えればいい、つまり怒りマネジメント手法が流行

します。しかし怒りの感情は第二次的に動員される感情で、第一次感情は、悲しみ、つらさ、不甲斐なさ等があります。それを隠蔽し、乗りこえようとして怒りの感情が仮構されると考えるのです。怒りマネジメント法はあくまでも対処法でしかありません。そして暴力は相手を選んでいきます。選択しているのです。自分より強いものには向かいません。ですから冷静な選択の範囲内だと考えるのです。つまり、全ての人に暴力を振るっているわけではなくて、暴力を振るう人を選んでいる、選択的な意思が働いているということです。その選択の際に社会的な力の差異が利用されます。これを「権力勾配」といいます。非対称な関係性ともいえます。ジェンダー関係がわかりやすいでしょう。スティグマを貼られやすい脆弱なカテゴリーともいえます。ここには学習という要素が強くなります。その人たちの生活世界を見ると、大変合理的な行動として選択されていると考えるのです。それを支える暗黙的思考があるので、そこをきちんと見ていくなど、このようなことを議論しながら、対応をしていることとなります。

また、別の言い方では希望を語ることもできます。チャンスでもあるというのは、承認欲求ではないですけれども、コロナ禍では「つながり欲求」が強くなっていると思います。折出先生もたくさん話されたことですが、「つながり欲求」は現実的です。最初にコロナが出た時に、フィジカルディスタンスということが言われました。同時にソーシャルディスタンスと間違った言い方を社会がしてしまったのです。ソーシャルディスタンスは間違っています。では何かというと、ソーシャル（社会的）にはコネクションしたほうが良いのです。物理的な距離は必要なだけけれども、ソーシャルに距離を持つ必要はありません。ただ、つながり方について、コロナ時代にふさわしく、ソーシャルコネクションを考えるべきだということです。ですから、ソーシャルディスタンスは不要だと国連も警告をしました。今こそつながらなければならぬ、ソーシャルコネクションをもっとすべきだったのです。背景にあるのはコロナ禍に相応しい「つながり欲求」の実現だと思うのです。

しかし、チャンスでもある!

物理的距離は必要だが、social distancingは不要
⇒つながりの再構築・創造・開発へ

- ・オンラインでのつながりとネットワーク（弱い紐帯）
- ・個人の「生きづらさ・不安」をつくりだす構造＝社会制度の見直し
⇒Homeだけではもたない
- ・ヴァルネラビリティ（脆弱で暴力を被りやすい人）の視点

芸術家の想像力 * うちで踊ろう # 星野源 # DancingOnTheInside

オンラインでのつながりというのは、ネットワークの基になっていくし、この1年間にわれわれが体験してきたことです。私もこの1年は、ひたすらオンデマンド教材を作っていたような感じでした。オンラインでのつながりとネットワーク、「弱い紐帯（ちゅうたい）」なのだけでも、大変、それが居心地のいいことの発見がされてきたと思います。先ほどの小学校のデータでも出ていたかもしれません。

しかし、対面的なコミュニケーションがなくなっていくので、生きづらさや不安、特に孤立も生じます。ここが強調されていくと困るので、しかもホームだけにそれを委ねると、ホームは両義的なので複雑です。ホームだけではもたないので、ホームに代わるソーシャルコネクションをどのように作りだしていくかということになってきます。今年は大きなテーマがよく見えたと思っています。

別の例です。星野源さんが『うちで踊ろう』という歌を作りました。あの時に私が感心したのは、この「うち」は、家ではないということです。Dancing On The Inside なのです。家で踊れない人たちがいることを星野さんは分かっていたのです。ですので、それは内側だ、内部だ、自分のうちで踊れない人たちは、心の中でいいから踊ってみようよということがメッセージです。さすがだと思ったのです。芸術家の想像力はたくましいと思いました。

誰とつながるかということ、これは折出先生が言われた「他者」です。家族の意味が再構成されざるを得ないし、スクールホームとして紹介された点と見事に重なってきます。教育学の先生でケアの話をごここまでされたので感銘を受けました。ケアと関わる辺りが、とても大事だと思って、星野源さんの「うち」は「ホーム」ではなかったこ

と重ねて考えました。心の中もあるし、本当に踊れる人は踊ったらいいのだらうけれども、どのように他者とつながるかということがテーマかと思いました。みんながそうして心のなかでつながることがメッセージなのでしょう。フィジカルには離れているけどソーシャルには踊りながらコネクションしているということで孤立を防ぐことができます。

私は10年ほど刑務所や少年院で脱暴力プログラムのSVの仕事をしてきました。用いられているのは認知行動療法プログラムが多いです。認知行動療法は頭を使う知的な作業となります。でもそれがうまく入らない人がいます。プログラムはあるのだけれども、それがうまく使えなくて、例えば、そこに書いた非認知的能力のようなものを、もう少し豊かにしておかないと、せっかく作ったプログラムが、難し過ぎて入らないのです。

多分、この話は、折出先生の前に、教職研究科の院生たちが報告したことと重なると思います。メタ認知能力の話だったり、リーダーシップの話だったり、居場所の話だったり、それから大人との意思疎通の違いだったりします。このようなことが大事になっているので、刑務所や少年院でやる取り組みも、要するに、社会が用意した適応的な認知行動療法だけではないものが必要なので、いろいろなアクティビティや豊かなプログラムが開発されないといけないと思います。

まとめた言い方ですが非認知能力の開発です。人間力といってもいいかもしれませんが、折出先生が、かなり体系的に話されたことと近いです。

最後に1つだけ言葉を紹介します。コロナ禍では、他者とつながる「つながり欲求」のようなものが大変強いといいましたが、家族の中だと、どうしても親密な関係なので他者性が低くなります。親密な関係性は家族が典型なのですが、家族の中では、お互いが他者ではないわけです。境界が低くなってしまいます。これは親密さの根拠になっていくので、時には侵入されていく場合もあります。相互関係ではなくなります。

それが暴力性を帯びて侵襲的になる典型は性的虐待です。それが起こりやすくなるとすると困ります。他者性を認めるということは、人格あるい

は権利、人権ということが発生してきます。ですので、それが子どもであっても、障害があっても、認知症のお年寄りであっても、家族のメンバーには人権が認められなければなりません。とくに家族はケアの領域です。そこにおける他者、つまり権利性を有する他者として家族を相互にみるのが要請されます。家族にはケアというのがつきものですが、そこにジャスティスという社会的なものが入り込みます。ケアとジャスティスは大変両立が難しいのですが、それは特に家族関係においてです。ステイホームの現実、このテーマを私たちに突き付けたと思っています。つながり欲求が強くなればなるほど、ここはきちんと見ておいて、どのように教育したり実践したりするかにつながっていくかなと思ったので、あえて強調したということになります。

そのようなことで、いろいろな意味で、私もこの1年は、自分自身が体験の相対化ができていたと思うので、次の過ごし方へどのように展開していくかです。貴重な経験を世界的にしてきたのではないかと思うことを言葉にし合うのはいいことかなと思いました。足りないところは、またあとで、話題をシンポジウムでしたいと思います。ありがとうございました。

春日井：ありがとうございました。お時間のなかで、少し急がせてしまったようで申し訳ありませんでした。

続きまして、シンポジウム前半のまとめということで、折出先生からコメントをいただきます。今のお二人の報告を受けてということで、よろしく願いいたします。

4 話題提供を受けて（折出先生）

折出：それぞれ、堀江先生も中村先生も、教育実践、福祉、あるいは病理に対する支援という、社会的実践も含めて、きちんとしたご経験と、その経験に基づく、当然ながら言葉によって対象化されておられましたので、非常にリアリティーに富んだお話で、大変私も刺激を受けました。

やはり、堀江先生のお話の中に出てくる子どもたちに、とても感心しました。つまり、私流の言

い方になりますけれども、コロナ禍にあっても、子どもたちなりに自分で、高学年の例が出ていたこともあるでしょうけれども、自分、あるいは自分たちでこの現実と向き合い、そして、それを読み取り、それから、自分たちで書き換えることができそうな面があれば、そこを探っていきたい、あるいは実際に探っているという姿が浮かび上がってきています。

例えば、前半のスライドに出てきた子どものコメント、SDGsの学びの中での、7月の時のコメントのお1人を引用しますと、自分だけ、自分の国だけがいいと思っていたけれども、世界のつながりをコロナで思い知って、それでは駄目なのだと思ったという、このような視点が出てくるというのは、これは私が引用させてもらった兵庫の6年生の女子の、たくさんの人が死んでいるのに、自分は受験のためにオンラインで授業を受けていいのかというのと、扱っている話題は違うけれども、根底においては、やはりプレ思春期を生きる彼や彼女らなりの学びほぐしというのでしょうか。

僕もアンラーニングにこだわるのですが、中村先生ほどではないのですが、ずっとこだわっているのですが、「学びほぐし」というのは、ちなみに、亡くなられた鶴見俊輔さんがアンラーニングをそのように訳しておられて拝借していますけれども、そのようなことが、この堀江さんの中に登場してくる子どもたちにも見られるようになっているのに、すごく感銘を受けました。

それから、後半のところ、やはり、「学校生活で嫌だ」というので、「行事の削減や縮小」をトップに挙げていた辺りに、今の子どもたちのつながる、集まる、そして、共につくるということへの基本的な欲求といいたいまいしょうか、そのような仲間感といっているのか、そのようなものが見事に出ていて、それをどのように生かしていくかということが、次の学校づくりの課題としてあるのではないかということを思いました。

あとは、アンケートを取られた、その結果については、どのように読み解くかというのは、またご参加の方々と一緒に議論をしていけばいいかなと思いますので、堀江先生のご報告には、ひとま

ずそのようにコメントをさせていただきます。

それから、中村先生のご報告は、とても私にとっては、よく、十分に理解できていないけれども、私自身の理解が乏しい分野の、そのような広い意味での福祉的な問題や、それから、特に暴力の読み解きという点では、どうしても表層をなでてしまいがちなのですが、非常にそこを深く掘り下げていただいて、大変刺激になります。

あとでまた、ご発言の中で一つコメントいただけたらと思うのですが、最後のほうのスライドに出てくるDV加害者に必要な対話とは、のところで、暴力的なコミュニケーションを肯定する男らしさの学び落としというのは、アンラーニングのことなのでしょう、それとも別の意味なのでしょう、かというの、少し私も関心があるものから、非常にそこは、もしお分かりであれば教えてください。

コメントの本題は、さすがと思ったのですが、ソーシャルディスタンスは不要であると、ソーシャルコネクションを、今こそ言うべきであるというのは、それに近いことを、私ももやもやしながら考えていましたので、非常にすばとおっしゃっていただいて、大変良かったと思います。

私のように、学校、教育実践、あるいは地域社会における子ども集団など、そのような分野で仕事をしてますと、まさに大人の世界も、それから教師同士も、それから、私のように私学の父母懇で関わっている、そのような意味の大人同士も、ソーシャルコネクションを非常に求めている、求めているけれども、それがうまく自分たちのコミュニケーションとして作り出せていない、そのようなもどかしさの中で、もやもやしながら模索をしているという現状ではないかなと思いました。

だから、孤立化しかねない状況の中で、それを対人的な、物理的な距離というのは、非接触が、コロナの感染防止という点では、先生がおっしゃったとおり、そのとおりなのでしょうけれども、だけれども、このソーシャルコネクションというものをどのようにつくっていくかということ、大変、きょうの宿題として受け止めていきたいと思いました。

これも、もし分かればですけども、お話の中

で、「ホームに代わるコネクション」というのが、これから大事だという、このホームだけではもたないという話の文脈の中でおっしゃった、ホームに代わるコネクションという辺りを、また教えていただければ。ストレートではないけれども、そのような視点で、子どもたちの関わり方を、私は子ども集団や、そのような面でも学校現場にアプローチしている一人ですので、参考にしていきたいと思って言った次第です。

ほかにも、いろいろとコメントをさせていただきたいことはありますけれども、暴力の捉え方、それから、今言ったソーシャルコネクションこそが、今求められているということ、それから、図らずもそのような暴力問題、福祉の面でアプローチされている中村先生も、アンラーンということにこだわってこられたという、それが非常にまた、私自身もまだまだ答えは出ないけれども、そこは大事にしていきたいと思えました。ご参加の皆さんと、また議論できたらと思います。以上です。

春日井：ありがとうございます。折出先生のコメントの中で、中村先生への質問が2つほどありました。男性生のなす暴力の読み解きに関わって、ホームに関わるコネクションという辺り、少し補足いただければと思いますが、いかがでしょうか。

中村：ありがとうございます。前者はもちろんそのとおりで、アンラーンは多義的な意味があります。しかも実践は難しいのですが、そのとおりです。それから、男性性の話もまさにそのとおりで、私が直接感じているところで、DV、性問題、性暴力の加害はほとんど男性です。さらに男性も被害に遭うので、ともに男性性の問題、男性性や男らしさの認知、行動、感情が、あたかも同心円的に広がっているのです。そこをどのように解毒するかという意味でもあるのです。

残念ながら、ジェンダーの視点というのが、社会の中に十分浸透していないことが、政治家などの女性蔑視発言でこの間によく分かってきました。そのジェンダーの視点の中でも、男性性ジェンダーをどのように扱うかというのは、あるいはスポーツ、それから非行の問題、それから性やDVなどの家庭内暴力の問題の辺りでは、大事なかと私

なりに思っています。

さらに、分かりやすい領域だけではなくて、なかなか男性が言葉にしにくいという非言語化領域がありますので、感情作用と関わって、大きなテーマがあるのではないかとも思っています。そのようなことで、先生がご指摘のようなことは、同じ感想で、同じスタンスでやっていますということです。

春日井：ホームに関わるコネクションの在り方のところは。

中村：またディスカッションのところでいいですか。

春日井：では、ディスカッションのテーマの一つにしましょう。

中村：適切に引き取って、受け取っていただきましてありがとうございます。

春日井：そうしましたら、短い時間ですけれども、ご参加いただいた皆さん方からの質疑、ご意見をお伺いしたいと思います。いかがでしょうか。

お一方よりチャットで、東日本大震災の取り組みとコロナ感染の状況に関わって、コメントをお寄せいただきました。チャットで書いていただいている中身を、少しご紹介いただければと思います。よろしくお願いします。

参加者：今のコロナ禍の学校の状況と子どもの状況というのは、私たちが体験した震災と、その後の学校の状況と、非常に似ているわけです。いわゆる校舎がない、青空学級、地域もなくなって、家もなくなって、子どもたちも転校してしまいますから、みんながばらばらになってくる。そして、親子関係に関わっては、DV、それから、さまざまな離婚の問題が発生しました。

すなわち、被災地から見ますと、その同じ状況が、今、日本や世界全体で広がっているかなという認識を持つのです。従って、この状況を、やはり教材化しないといけません。つまり、子どもたちが抱えている苦悩や悲しみや怒りなど、その正体は何なのかということを目撃して対象化します。先ほどの、折出先生がおっしゃったように、対象化する。そして、その対象化したものを、交流しながら、その意味を問う。意味付けを、そこに与えることにおいて、私たちは、この世界を、

少し別な見方、見方を変えていって、新しい世界観をつくっていけるのだらうと思います。

今までのような経済成長、教育思想ではやっていけないのだという見方に転換をして、新しい地域、あるいは世界の見方を獲得していくということが、大人も子どもたちも、両方とも必要なのだらうと、話を聞いていまして、改めてそのような実感を持ちました。同じような問題提起をされていると、私は受け取りました。以上です。

春日井：ありがとうございます。コロナ感染に関わる地域、世界の状況と、東日本大震災後の震災地の状況というのは、まさに重なっているという指摘でした。そこで子どもたちがどのような不安、悩みや怒り、願いなどを持っているのかということ、そこを語り合うことの大事さは、まさに各学校での課題と重なるのではないかということですね。

5 ケアすることと自己実現について

春日井：折出先生からは、講演の後半で、支援とケアと、つながって生きるということを柱としてお話いただきました。そこでは、支援とケアとの関わりについて、支援もケアも同じように相互性であったり、それは他者との関わりであったり、そこで認められるということであったりします。つまり、支援することは支援されること、ケアすることはケアされること、そのような文脈で語られていました。その中で1つ違ったのが、支援というのは「自己決定」を支え、助けると言われました。ケアというのは、「自己実現」することを助けると言われたと思います。自己決定と自己実現という辺りの捉え方について、補足いただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

折出：大事な論点をありがとうございます。おっしゃるとおりで、支援について、現時点での私の理解を述べます。

自己決定をと言ったのは、いろいろな選択肢、それは障害をお持ちの方であれ、あるいは現在の経済的な貧困からどのように抜け出すかという状況に置かれている方々であれ、今日の制度ないしは社会的なネットワークの中での選択肢がいろいろとある中で、それを選び取りながら現実を生き

抜いていくというその主体は、子どもであれ、若者であれ、大人であっても、当事者であるその人です。

その自己決定というものを、やはり最後のところは尊重しながら、ではどのように選択したらいいのかという、その選択肢を選び取っていく上で必要なことはサポートしていく、情報も提供していく、あるいは場づくりもしていく、それが支援ではないかと思うわけです。

ケアというのは、先ほど中村先生から過大な評価を頂いて恐縮ですけれども、確かに私どもが教育方法学をやっている中では、ケアという言葉を盛んには使うのだけれども、何か傷ついた子どもの世話をする、手当てをする、あるいは優しく配慮した接し方をするなどという、何かそのような、具体的なスキルのようなレベルで受け止めている傾向があるように、私は見ていまして、以前は私もそのようなところに片足を突っ込んでいたので、自分に対する自戒といえましょうか、問い直しも含めて学んでいるところなのですが、メイヤロフの考え方を引用したのもそこからです。

つまり、ケアというのは、決してそのようなスキルのこと、それもあるでしょうけれども、そこにとどまることなく、むしろ一人の権利主体、一人ひとりのそのような人格を持つ、生き抜いていく主体として尊重し、そのようにしてその人にコミュニケーションしていく、あるいは、もちろん何らかの支援と、そこは重なっています。

場を提供したり、情報を提供することもありますが、基本は権利主体としての、その人の尊厳というものを、きちんと意識して関わっていくということが、ケアの本質ではないかと思えますので、そこを、言い分ける、使い分ける意味で、後者のほうが、ケアのほうは、メイヤロフの言葉を使って「自己実現」、前者のほうの支援については、当事者であるその人の自己決定をサポートし、一緒にそれを探り当てていこうとする、そのような言い方をしています。

春日井：ありがとうございます。自己決定の場合は、選択を迫る具体的な課題が目の前にあって、その選択を支援するという意味合いで、今、伺いました。ケアの場合は、その前提として、その人

るかどうかの判断をする時期です。その時に、その家族を支える「家族再統合応援会議」というのを地域でやるのです。これは、児童相談所が中心になってやります。昨日もありまして、地域の子育て団体、それから保育園、受け入れ先になる新しく行く小学校の先生、今まで育っていた養護学校や養護施設の先生など 20 人ぐらい集まって開催しました。その家族をどのように支えようかという話をします。

これなどは、典型的にアロケアリングで、コミュニティが機能しているからこそ可能になります。つながり欲求をつなげていきます。おそらく、それは震災後でもいろいろなことがあったかと思えます。そのような力を言語化していくのが大事なかなと思って紹介しておきます。アロケアリングといいます。

その中で、他者の存在、家族以外の人間関係との交流ができる、どんなに発達課題があったとしても、人間力が育つ子どもたちは、やはり多いです。これは先ほどの非認知的能力の話につながっていきます。

春日井：ありがとうございます。家族が他者ではなくて、折出先生のほうは、他者との双方向の関わりを相互嵌入（かんにゅう）という言葉で表現されましたけれども、中村先生からは家族との関わりは、他者とは異なる危うさを持つ相互侵入という言葉で表現されました。従って、家族支援の際には、他者、それは個としての他者とは限らずに、むしろコミュニティとしての他者との関わり、ソーシャルコネクションが重要であるということ。そうすると、学級づくりや学校の在り方、その意味というのが、改めて今日的な意味を持つのではないかと、そのようにつなげてお伺いしました。

7 コミュニティにおける学校の役割

春日井：堀江先生の報告で、コロナ感染拡大のもとの子どもたちの登校状況の話もありました。そこには課題だけではなく、ICTの活用も含めて、たくましくつながりを作ろうとしている子どもたちの姿もありました。その一方で、おそらく比較的恵まれた地域環境にあって、塾に通っている子

どもたちもたくさんいるというお話もありました。このコロナの状況の中で、子どもたちが学校にあまり来なくて、塾でのオンライン授業が拡大した場合、コミュニティとしての学校の在り方の今後について少し気になったのですが、その辺りはいかがでしょうか。

堀江：発表の中では触れなかったのですが、春日井先生のおっしゃるとおり、分散登校のあとで、全く学校に来ない6年生と5年生が結構いました。高学年に多かったです。別に具合が悪いわけではないのですが、コロナ感染予防という連絡で来なくて、それは出席扱いにしろという文科省の通達もあったのですが、そうはいいながら、塾がZoomだったり通学だったり、塾には行き、友達とも外で遊び、ただ昼間の時間は、「学校は要らん」という判断を、親子でしていたという部分もありました。

そして、3学期になると、例年6年生は受験に向けて休む子が多いのですが、今年は、もう特に、本当にコロナ感染予防ということで、40人学級で10人ぐらいしかいない状況が1ヶ月続いたり、1月最終週は5人ぐらいでした。だから、本来はつながりを求めている子どもも親も「学校内に「つながり」がなく、そして普通に教科書を勉強するだけなら要らん」という、結構厳しい、積極的に学校に行かないという選択をするご家族はいました。

中には、自分が主体的に勉強ができると思われる教科だけ来る、図工や、家庭科も割と来る子もいたのですが、「それ以外の国算社理は要らん、塾でやる」といった現状がありまして、本当に、今までの学校を見直していかないと、本当に捨てられてしまう、要らんと判断されるという危機感もありました。

春日井：ありがとうございます。コロナ感染拡大のあとの再登校の中で、学習面での遅れの回復が重視をされて、小学校でも6時間、中学校でも7時間授業といった状況が全国的に広がりました。今のお話だと、それだったら塾でオンライン授業を受けているのと変わらないではないかといった部分が、あったかもしれないと思いました。

だからこそ、子どもたちが再登校の時に、「学校

が始まった、友だちに会えるからうれしい」と言
って来た時の気持ち、願いや要求のようところが、
学級の楽しい取り組みや行事の工夫、あるいは
授業での他者との関わりの中で形になっていく
こと。学校のこれからのありようが改めて問わ
れているのではないのでしょうか。そこが、今回
の大きな1つのテーマでもあったのではないか
と、思っ
て聴かせていただきました。参加いただいた皆
さん方、ほかにはいかがでしょうか。

8 矯正教育とアンラーン

参加者：すみません、中村先生の話で、刑務所出
所者に対する矯正教育などの例が出てきたので、
私自身もそれに関わってきたので、認知行動療法
の限界というものの1つは、やはりこのプログラ
ムに対して、検討する人がボランティアであつた
りして、圧倒的に少ないのです。認知行動療法は、
認知であつたり、行動のレベルであつたり、即効
果が認められるので、ある意味では非常に分かり
やすいです。

しかしながら、若い頃に歓楽街を歩いて怖いお
兄さんに200万円をもらったような人は、認知行
動療法でも、刑務所を出所して、一時的には矯正
したり、いい人にはなれるけれども、それ以降は
ほとんど変わらないです。つまり、表層的な形
での、いわゆる矯正教育のプログラムなのです。

先ほど言われた、つまり人と関わって人生を変
えるなどは、ある意味では、それは一般教育でも
共通なのですが、本当に人格やパーソナリティー
に組み込んだ教育をしていかないといけな
いし、このコロナ禍で、表層的な部分
がはぎ取られているので、ここで、まさにアン
ラーニングという言葉と関係します。

つまり、人間というのは学んで生きているので、
学ばないことを選択もきわめて主体的だとい
う発想を持つということです。つまり、教
え込んだり、暗記させたりではなくて、本
当の学びはそのようなものだし、人格に
跳ね返るのだというのが、現場の津々浦
々で、集約されていくということが、ま
さにコロナで学び、アフターコロナの
教育課題だと、私は思っています。

いみじくも、矯正教育の中で、認知行動療法だ

けがやられているということだけの問題から発
して、われわれはずいぶん学ぶことが多いと思
います。

春日井：ありがとうございます。中村先生、今
いただいたご意見に関わって、いかがでし
ょうか。

中村：ありがとうございます。全く同感で、
矯正教育だけではなくて、認知行動療法流
行りのようなところもあります。有効な局
面もあるので効果的に使っていければいい
と思うのですが、スキル先行型だと、や
はり表層的になっていくと思っています。

それで、先ほど、少し説明が足りないとい
うことで言われたのが、怒りの感情は、私
は正しい適切な感情だと思います。やはり
人間にとっては必要な感情です。それが
攻撃性として、さらに暴力として、しか
もそれは、特定の他者に対する暴力とし
て学習されていくのが対人暴力でしょう。
誰彼となく暴力を振るういじめっ子はい
ないと思います。やはり、相手を選んで
います。それは、その時点で、既に思考
や認知が入っているわけです。そこで何
かを学習してきたのです。それをアンラ
ーンするというのが、どのようにやたら
可能かということは、認知行動療法だけ
では無理なので、どのように考えてい
けるかということだと言
いたかったのです。認知行動療法もマ
インドフルネスといたりしたり、言語
行為にねざしている自分が作った、社
会の影響もあるイリュージョン（幻影）
を溶解させていくことになります。そ
のしに他者の存在は大きいです。

最後に1つだけニーズとウォンツの話
をします。ドリルを買いに来た若い女性
の話です。ドリルを買いに来たという
ことで、店員としては高い万能ドリル
を売りつけたらいいのだけれども、そ
の女性が欲しかったのは、実は「穴」
なのです。

ところが、やはりきちんとした対話力
のある人は、何のための「穴」かにつ
いて聞きます。壁に「穴」を開けるの
は大変なことなので、そのアパート
を出るときに穴埋めをしなければなり
ません。だから、小さな穴でいいの
ではないか、しかし、よくよく聞いたら
、どうしても日曜日になると鬱のよ
うになって、それで、明日からきちん
と仕事をするために、元気の出る服
を壁に掛けておきた

いというのがさらに奥にあるニーズだと分かったわけでした。そうすると、「穴」ではなくてフックでいいわけでした。壁に、簡単に掛けるものでいいわけです。

店としてはもうからないのだけれども、ニーズとウォンツ、つまりドリルとしてウォンツを買いに来ただけだけれども、ニーズは穴だったと。しかしそのニーズは単に顕在化しているだけで、さらに潜在的に向こうにあるのは「意欲、動機、明日への希望」だったのです。明日からの元気が欲しかったのです。だから、「穴」でなくてもいいということに、対話を通して発見できていくような、援助者でありたいということが言いたかったことです。これはケアともいえるでしょう。

ニーズとウォンツの二項対立でもなく、支援する、されるの二項対立でもなく、その先の希望や意欲や動機へといきつく店員さんの非認知能力だといえます。そのためにはケア力に長けた対話が必要ということをや言いたかったのです。

そこで、指導・支援・ケアを考える……

「対話すること・聴く力」

「ドリルが欲しいんです。」
と工具を買いに来た。

次のひとこと……

なるべく高価なものを売りつけようかと。
しかし、心ある店員は対話を試みる。
* 本当に欲しいものを探る対話

欲しいのは「穴」(でもそれは顕在的ニーズ)

ドリルは欲しいもの＝ウォンツ(デマンド)

背後のニーズもいろいろ

顕在的と潜在的、主観的と客観的
支援者の思い込みもある
(パターンリズム、無意識のバイアス、
経験主義)

しかし、これらの先に・「対話」をとおして
幸福・希望が……。すると「穴」でもない。

9 まとめにかえて

春日井：では、折出先生、今までの議論を受けて一言ありましたら、お願いいたします。

折出：短く言います。きょうの私の話も、不十分

な面もありましたけれども、受け止めていただきまして、ありがとうございます。それから、お2人の実践的、かつ社会的実践も含めたご報告によって、その後の、短いけれどもディスカッションを通して、つながるということが、今までの単なる延長ではなくて、特に教育に引き寄せていえば、堀江先生のご報告からも浮かび上がりましたように、コロナ禍で、子どもは子どもなりに選びながら発達していく主体として、学校と向き合い直しています。

だから、そこを表面的に、もう学校は要らないと言った子どもが、単に進学のほうに傾いているというのではなくて、改めて学校とは何かということ、子ども自身が自分の言葉で、大人に向かって問い掛けるような状況が、今は明らかに、都市部だけではなくて、いろいろな形で生まれつつある、生まれています。まずはそのことと向き合っていくということが、教師の立場では子どもたちとつながる、あるいは、あえて丁寧にいえば、つながり直すということの意味ではないかというのを、1つ学びました。

それから、そのことと併せて、やはり他者にこだわりますけれども、学校は、子どもにとっては、信頼できる他者と出会う場としての学校というもの、もう一度、われわれは保護者、教師、それから住民が一緒になってどのようにつくっていくか、もちろんその中心は子どもなのですが、信頼できる他者と出会い、あるいはそのような出会いを学ぶ場としての学校空間というものを、やはり子どもたちと一緒に上げていくということの大切さを学びました。

最後ですけれども、もし皆さまの関心とつながるところがありましたら、アザーリング、あえてアザーにingを付けた、このアザーリングという、日本語に訳しにくいのですけれども、他者化する、あるいは自らも他者を生きるといいたいでしょうか。生きるというどうしても、私を生きるとなりがちなのですけれども、そうではなくて、他者の世界を生きるということによって、より一層、私を生きることができるのだという、この反転といいたいでしょうか、弁証法的な捉え方も、引き続き私なりに学ばせていただけたらと思ひまして、大きな

刺激の場となりましたことを述べておきたいと思います。以上です。

春日井：ありがとうございました。では、堀江先生からも一言いただいて終わりにします。

堀江：学校は信頼できる他者と出会う場、本当にその言葉をかみしめて、毎日そのように、子どもが思っただけ帰れるように頑張りたいと思いました。

春日井：ありがとうございます。今回は、120名の方から申し込みをいただきました。遠方からもご参加いただきまして、ありがとうございました。つながって生きるということをキーワードに、この企画を組みましたが、孤立しているということは、まさにこのコロナ禍のもとで存在理由を失って、自らの命に関わる事態が増えているということです。そのような中で改めて折出先生から最後にまとめていただきましたが、かけがえのない他者、信頼できる他者との出会い、あるいは自分自身がそのような他者になっていくということ。そのような相互性、それを学校や職場の中につくっていくことの大事さを、改めて確認し共有しながら、また、明日からの子どもたちとの関わりの中で生かしていきたいと思っています。

本日は長時間、ありがとうございました。3人の先生方、どうもありがとうございました。